

20030739

厚生科学研究費補助金

こころの健康科学研究事業

重症心身障害児施設入所児(者)の
20余年間の実態調査の
分析に関する総合研究

平成15年度 総括研究報告書

主任研究者 江 草 安 彦

平成16(2004)年3月

厚生科学研究費補助金

こころの健康科学研究事業

重症心身障害児施設入所児(者)の
20余年間の実態調査の
分析に関する総合研究

平成15年度 総括研究報告書

主任研究者 江 草 安 彦

平成16(2004)年3月

平成15年度厚生科学研究費補助金
〈こころの健康科学研究事業〉

重症心身障害児施設入所児（者）の20余年間の
実態調査の分析に関する総合研究

主任研究者 江 草 安 彦（日本重症児福祉協会）
分担研究者 三 田 勝 己（愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所）
平 山 清 武（琉球大学）
鈴 木 康 之（鶴風会）
小 田 滋（睦学園）
研究協力者 岡 田 喜 篤（川崎医療福祉大学）
末 光 茂（旭川荘）
平 元 東（北海道療育園）
原 誠 之 助（旭川療育園）
泉 川 良 範（名護療育園）

目 次

| | |
|-------------------------|----|
| 1. 序 論 | 1 |
| 2. 方 法 | 3 |
| 2.1. チェック項目のレベルの検討と再設定 | |
| 2.2. 変化プロセスの特定 | |
| 2.3. データ処理・分析 | |
| 3. 運動機能 | 15 |
| 3.1. 姿勢 | |
| 3.2. 移動 | |
| 3.3. 変形・拘縮（躯幹） | |
| 3.4. 変形・拘縮（股関節） | |
| 3.5. 筋緊張の状況（安静時） | |
| 3.6. 筋緊張の状況（運動時，精神的緊張時） | |
| 4. 視聴覚機能 | 55 |
| 4.1. 視覚 | |
| 4.2. 聴覚 | |
| 5. 知的機能 | 65 |
| 5.1. 遊び | |
| 5.2. コミュニケーション（理解） | |
| 5.3. コミュニケーション（表現） | |
| 6. 問題行動（異常習慣） | 83 |
| 6.1. 指しゃぶり・髪抜き・耳いじりなど | |
| 6.2. オナニー | |
| 6.3. 自傷 | |
| 6.4. 首振り・頭叩きなどの常同行動 | |
| 6.5. 便こね | |
| 6.6. 異食 | |
| 6.7. その他 | |

| | |
|------------------|-----|
| 7. 問題行動（対人関連行動） | 118 |
| 7.1. 攻撃的・反抗的態度 | |
| 7.2. 排他・拒絶的傾向 | |
| 7.3. 奇声・叫声 | |
| 7.4. ひどいいたずら | |
| 7.5. 衝動的・発作的行動 | |
| 7.6. 他害 | |
| 7.7. その他 | |
| 8. 日常生活動作（排泄） | 154 |
| 8.1. 排尿（尿意の有無） | |
| 8.2. 排尿（排尿の知らせ） | |
| 8.3. 排尿（排尿の介助） | |
| 8.4. 排便（便意の有無） | |
| 8.5. 排便（排便の知らせ） | |
| 8.6. 排便（排便の介助） | |
| 9. 日常生活動作（食事） | 184 |
| 9.1. 口の開閉 | |
| 9.2. 咀嚼 | |
| 9.3. 嚥下 | |
| 9.4. 摂食方法 | |
| 9.5. 食事の介助 | |
| 9.6. 食の形態 | |
| 10. けいれん | 214 |
| 10.1. てんかん性発作 | |
| 10.2. 抗痙れん剤服用の有無 | |

1. 序 論

日本重症児福祉協会では、全国公法人立の重症心身障害児施設の入所者の実態を把握するために、1978年度（昭和53年度）より当協会でも独自に作成した個人チェックリストを用いて調査を始めた。その10年後、チェック項目の見直しが行われ、1988年度より改訂版による調査が継続された。そして、この調査は2002年度（平成14年度）現在25年間に至っている。調査項目は基本的項目とチェック項目に大別され、基本的項目には、性別、年齢、入所時の年齢、在園期間、体重、大島の分類、病因別発生原因などの情報が含まれる。チェック項目は、運動機能、視聴覚機能、知的機能、問題行動、日常生活動作、けいれんに関する内容を含んでいる。基本的項目は旧版と改訂版で概ね共通しているが、チェック項目は両版でかなり違いがあり、改訂版で削除されたり、新たに加えられたものもある。

個人チェックリストは毎年日本重症児福祉協会より全国公法人立の重症心身障害児施設へ送付され、入所者全員についての4月1日現在の実態が記入された。これらは当協会へ回収され、コンピュータの記憶メディアに記録して保存してきた。調査期間25年間を迎えた2002年現在、個人チェックリストに記入された入所者数は、1978年度の約3,000人から約9,000人まで漸増し、25年間の延べ人数にすれば約16万人分の記録が集積された結果となっている。私たちはこの記録を解析して、25年間の入所者の推移や横断的な特徴を明らかにし、さらに、一人ひとりの入所者を縦断的・追跡的にフォローすることによって重症児の経年的変化（成長・発達・障害内容や程度など）を明らかにすることを目指した。

本研究では3年間の研究計画の最終年度となり、初年度の横断的分析、2年度の基本的項目の縦断的分析に続いて、チェック項目の縦断的分析を行うことを目的とした。分析に先立って、個人チェックリストの旧版と改訂版ではチェック項目の内容やレベルに違いがあるので、可能な限り25年間通して分析するために、大分類化を含めた検討を加えた。次いで、チェック項目の経時的な変化プロセス（改善・不変・退行）を特定するための基準を定義し、さらに、変化が同定された時点で関連が想定される要因との対比ないし相関を分析することとした。

その主要な結果を幾つかあげると、縦断的分析の信頼性を確保するために、5年以上入所期間のある症例を対象としたが、その人数は約9,000名となった。まず、運動機能に着目すると、改善あるいは退行いずれかの変化が約30～40%の対象者で特定され、両変化の頻度（回数）比からみると、全体的には退行傾向が推察された。視聴覚機能の変化は20～25%の対象者にみられ、視覚機能は若干退行傾向、聴覚機能は改善

と退行が同等に現れた。知的機能は約半数の症例が変化を示し、全体的には改善傾向が推察された。問題行動に変化を示した対象者は10～35%にわたり、チェック項目によって違いが大きかった。全般的な改善あるいは退行傾向もチェック項目によって様々であった。日常生活動作は、数個のチェック項目を除くと、20～40%の対象者に変化がみられ、全体的には退行傾向が示唆された。てんかん発作の頻度は約半数が変化を示したが、改善と退行が同等であった。本分析結果は重症児といえども様々な変化を示すことを明らかにし、それは当初予測した人数をはるかに超えるものであった。短期間の横断的分析では決してとらえることができない、長期間のデータに基づく縦断的分析によって始めて解明できた成果といえる。

2. 方 法

2. 1. チェック項目のレベルの検討と再設定

上述したように、本年度は、各チェック項目の経時的な変化プロセス（改善、不変、退行）を特定し、変化が発生した時点（移行時）で、関連が想定される要因との相関ないし対比を分析することに着手した。図2-1および図2-2はそれぞれ個人チェックリストの旧版、改訂版である。この個人チェックリストには、運動機能、視聴覚機能、知的機能、問題行動、日常生活動作、けいれんに関するチェック項目が含まれている。しかし、旧版と改訂版では内容やレベルに違いがあるので、可能な限り25年間を通して分析できるように、必要に応じて大分類化をするなどの再設定を行った。

<運動機能>

(1) 姿勢・移動（旧版・改訂版）

<旧版>

| 大分類 | 姿 勢 | 移 動 |
|-----|------------|------------|
| A | 1 | 1 |
| B | 2, 3 | 2, 3, 6, 7 |
| C | 4, 5 | 4, 5, 8 |
| D | 6, 7, 8, 9 | 9~16 |

<改訂版>

| 大分類 | 姿 勢 | 移 動 |
|-----|---------|------------|
| A | 1 | 1 |
| B | 2, 3 | 2, 3, 4 |
| C | 4, 5 | 5, 6, 7, 8 |
| D | 6, 7, 8 | 9~16 |

A：原始反射期，B：立ち直り期，C：平衡期，D：協調運動期

（注：この2項目から大分類できるのは、8歳以降である）

姿勢項目と移動項目で、A～D各群の内容に違いがある場合、個別の評価を必要とする。原則的には、AよりもBが、BよりもCが、CよりもDが優先する。

(2) 変形・拘縮（改訂版）

変形・拘縮は6部位について調査されているが、躯幹、股関節に限定する。特に、躯幹と股関節はそれぞれ脊柱側弯と股関節脱臼を調査するためである。項目のレベルの変更はない（1～4）。

(3) 筋緊張の状況（改訂版）

安静時，運動時あるいは精神的緊張時ともに対象とする。項目のレベルの変更はない（1～3）。

<視聴覚機能>

(4) 視覚（旧版・改訂版）

旧版と改訂版で項目レベルが同じであり，25年間継続して分析可能である。項目のレベルの変更はない（1～4）。

(5) 聴覚（旧版・改訂版）

旧版と改訂版で項目レベルが同じであり，25年間継続して分析可能である。項目のレベルの変更はない（1～4）。

<知的機能>

(6) 遊び（旧版・改訂版）

旧版5レベル，改訂版7レベルと違いがあり，統合した項目レベルを用いる。

| | 旧 版 | 改訂版 |
|---|-----|------|
| A | 1 | 1 |
| B | 2 | 2, 3 |
| C | 3 | 4 |
| D | 4 | 5, 6 |
| E | 5 | 7 |

(7) コミュニケーション：理解（旧版・改訂版）

旧版 5 レベル，改訂版 4 レベルと違いがあり，統合した項目レベルを検討する。

| | 旧 版 | 改訂版 |
|---|------|-----|
| A | 1 | 1 |
| B | 2, 3 | 2 |
| C | 4 | 3 |
| D | 5 | 4 |

(8) コミュニケーション：表現（旧版・改訂版）

旧版 5 レベル，改訂版 6 レベルと違いがあり，統合した項目レベルを検討する。

| | 旧 版 | 改訂版 |
|---|-----|------|
| A | 1 | 1 |
| B | 2 | 2 |
| C | 3 | 3, 4 |
| D | 4 | 5 |
| E | 5 | 6 |

<問題行動>

(9) 問題行動（改訂版）

問題行動は旧版および改訂版でともに調査されているが，詳細な調査がされている改訂版のみを対象とする。異常習慣および対人関連行動ともに全ての項目を対象とする。項目のレベルの変更はない（1～3）。

<日常生活動作>

日常生活動作に関するチェック項目は，旧版と改訂版で大きく異なっているので，分析は改訂版のみを対象とする。

(10) 排尿（改訂版）

<尿意の有無>に関しては，(1. 有)，(2. 無)の番号を入れ替え，機能レベルの順とする。(3. 不明)は分析から外す。<排尿の知らせ>，<排尿の介助>に関しては，項目のレベルの変更はない。

(11) 排便（改訂版）

<便意の有無>に関しては，(1. 有)，(2. 無)の番号を入れ替え，機能レベルの順とする。(3. 不明)は分析から外す。
<排便の知らせ>，<排便の介助>に関して，項目のレベルの変更はない。

(12) 咀嚼・嚥下（改訂版）
＜口の開閉＞，＜咀嚼＞，＜嚥下＞ともに，項目のレベルの変更はない。

(13) 摂食方法（改訂版）
（6.その他）は分析から外す。

(14) 食事の介助（改訂版）
項目のレベルの変更はない。

(15) 食の形態（改訂版）
（6.その他）は分析から外す。

＜けいれん＞

(16) けいれん・てんかん発作（旧版・改訂版）
旧版の項目レベルを逆順にすると，番号が機能増悪から良好へ並び，改訂版との一貫性がとれるので，25年間継続した分析が可能となる。

(17) 抗けいれん剤服用の有無（現在の状況）（改訂版）
抗けいれん剤に関する項目は改訂版のみである。項目のレベルの変更はない。

個人チェックリスト

施設番号 _____ 氏名 _____ 性別 ♂ ♀ DA _____ 身長 _____ 体重 _____
 生年月日 _____ 年 月 日 年齢 _____ 年 月 日 入籍年月 _____ 年 月 日
 大別による分類 () _____ 診断 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

| | | | | | | |
|---------------|--|---|---|---|---|---|
| I 姿 勢 | 1. どんな姿勢でも首の坐りなし 2. おたまりであるが腰位で頭を上げる 3. おたまりであるが背位で(体位反応)頭を上げる 4. よりかかっているが坐位可能 5. よりかかりなしでの坐位可能 6. 四つ這い 7. 膝立ち 8. つかまり立ち 9. 一人立ち | 1. 経管 2. 哺乳 3. 飲食飲水 4. 普通食 5. 全介助だが介助容易 6. 簡単な衣服ならぬぐうだけできる 7. 簡単な衣服なら着脱できる 8. ボタン、ヒモなど介助なしでやれば全部自分でできる 9. ボタン、ヒモなども着脱可能で着脱できる | 1. 何もしていない 2. 一人遊びをする 3. 他児の遊びを見ている 4. 大人を媒介として他児と遊ぶ 5. 仲間遊びができる | 1. 状態観察 2. 身体的特徴に反応する 3. 話しかけに反応する 4. 視線の意味を理解する 5. 日常生活を理解する | 1. 状態観察 2. 意味の分らない声や、意味の分らない身ぶりで表現する 3. 視線や意図した身ぶりで表現する 4. 2語文で表現する 5. 文脈で表現する | 1. 現在1度もみられない 2. 過去にみられたが、ここ1年間は発作はみられない 3. ここ1年間は発作はみられるが回数少ない 4. ここ1年間は発作は10回以上であるが、ここ2ヶ月間は発作がみられない 5. ここ2ヶ月間は発作は10回以上であるが、ここ2ヶ月間は発作がみられない 6. ここ2ヶ月間は発作がかなり多い |
| | 1. 知らせないで全介助 2. 知らせるが全介助 3. 時間や距離・姿勢をみては表紙なし 4. おきている時も出れば見える 5. おきている時も出れば見える 6. おきている時も出る前に見える 7. おきている時も出る前に見える 8. 一人でできるが、パンツをぬく時も介助が必要 9. 一人でできるが、パンツをはく時も介助が必要 10. 介助不要 | 1. 全介助だが介助容易 2. 全介助だが介助容易 3. うがい水を口によく含むことができる 4. うがい水をほきだすことができる 5. うがいができる 6. 洗面・はみがきの動作は一人とできないがそれらしきことはできる 7. 洗面・はみがきができる 8. 介助不要 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 浴場の出入りはできるが湯おねの出入りはできない 4. 浴場の出入り、湯おねの出入りはできるが洗えない 5. 洗うことができる 6. 介助不要 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 浴場の出入り、湯おねの出入りはできるが洗えない 4. 浴場の出入り、湯おねの出入りはできるが洗えない 5. 洗うことができる 6. 介助不要 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. うがい水を口によく含むことができる 4. うがい水をほきだすことができる 5. うがいができる 6. 洗面・はみがきの動作は一人とできないがそれらしきことはできる 7. 洗面・はみがきができる 8. 介助不要 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. うがい水を口によく含むことができる 4. うがい水をほきだすことができる 5. うがいができる 6. 洗面・はみがきの動作は一人とできないがそれらしきことはできる 7. 洗面・はみがきができる 8. 介助不要 |
| II 移 動 | 1. 移動できない 2. 袖まわり移動 3. 背這い移動 4. 膝這い移動 5. 肘這い移動 6. 半歩(不安定) 7. 完全歩(安定) 8. いざり移動 9. 四つ這い移動 10. 膝立ち移動 11. つたい歩き 12. 両手をさえ歩き 13. 片手をさえ歩き 14. 独歩(不安定) 15. 独歩(安定) 16. 走る | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 |
| III 出 発 | 1. 口の巾に入れてやっても唇下閉鎖 2. 口の巾に入れてやれば唇下閉鎖する 3. 口の巾に入れてやればしゃやくする 4. 歯を噛ませてやると上手になる 5. 歯について介助を要する 6. 時々やると何とかなる 7. 一人でできるが閉鎖まよごす 8. 一人でできる | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 | 1. 全介助 2. 全介助だが介助容易 3. 全介助だが介助容易 4. 全介助だが介助容易 5. 全介助だが介助容易 6. 全介助だが介助容易 7. 全介助だが介助容易 8. 全介助だが介助容易 9. 全介助だが介助容易 10. 全介助だが介助容易 11. 全介助だが介助容易 12. 全介助だが介助容易 13. 全介助だが介助容易 14. 全介助だが介助容易 15. 全介助だが介助容易 16. 全介助だが介助容易 |

図2-1 個人チェックリスト (旧版)

| | |
|-------|--|
| 施設長氏名 | |
| 記入者氏名 | |

個人チェックリスト

注) □内に該当する数字を右詰で記入して下さい。

(「」内は自由記述です。
不明な点は別紙「記入上の注意事項」を参照して下さい。

| | | | | | |
|---|---|--|--|---|---|
| <p>1. 施設番号 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14</p> <p>2. 住所番号 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20</p> <p>3. 生年月日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>4. 性別 (1:男 2:女 3:不明)</p> <p>5. 入所年月日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>6. 入所経路 (1:有 2:無)</p> | <p>7. 記入年月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>8. 大浴の分類 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>9. 身長 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>10. 体重 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>11. 発達検査・知能検査 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>12. 検回日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> <p>13. 検回時間 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21</p> | <p>1. 居住ありで、どんな家勢でも住むのすかりなし 2. 住み足りないか部屋数を増やせる 3. 住み足りないか部屋の広さを増やせる 4. 住み足りないか部屋の向きを改善できる 5. 住み足りないか部屋の採光を改善できる 6. 住み足りないか部屋の騒音を減らせる 7. つのまり立ち 8. ひより立ち</p> <p>2. 特等でない 3. 安全確保 4. 安全確保 5. 防犯 6. 防犯 7. 防犯 8. 防犯 9. 防犯 10. つない歩き 11. 両手をさえる歩き 12. 片手をさえる歩き 13. 歩歩(不安定) 14. 歩歩(不安定) 15. 歩歩(不安定) 16. 走る</p> | <p>1. ミルク・飲料水 2. キッチン 3. 洗面所 4. 浴室 5. 廊下 6. その他 (中心動線設置などを含む)</p> <p>1. 遊ばないものはなくみられない 2. 汚れたものはすぐ拭き取る 3. 虫の発生を予防している 4. 虫の発生を予防している 5. 大人(職員や家族)と遊ぶ 6. 大人(職員や家族)を介して他児と遊ぶ 7. 仲間遊びができる</p> | <p>1. 身体的、社会的行動 2. 身体的行動 3. 社会的行動 4. 身体的行動 5. 社会的行動 6. 身体的行動 7. 社会的行動 8. 身体的行動 9. 社会的行動 10. 身体的行動 11. 社会的行動 12. 身体的行動 13. 社会的行動 14. 身体的行動 15. 社会的行動 16. 身体的行動 17. 社会的行動 18. 身体的行動 19. 社会的行動 20. 身体的行動 21. 社会的行動</p> | <p>1. 身体的、社会的行動 2. 身体的行動 3. 社会的行動 4. 身体的行動 5. 社会的行動 6. 身体的行動 7. 社会的行動 8. 身体的行動 9. 社会的行動 10. 身体的行動 11. 社会的行動 12. 身体的行動 13. 社会的行動 14. 身体的行動 15. 社会的行動 16. 身体的行動 17. 社会的行動 18. 身体的行動 19. 社会的行動 20. 身体的行動 21. 社会的行動</p> |
|---|---|--|--|---|---|

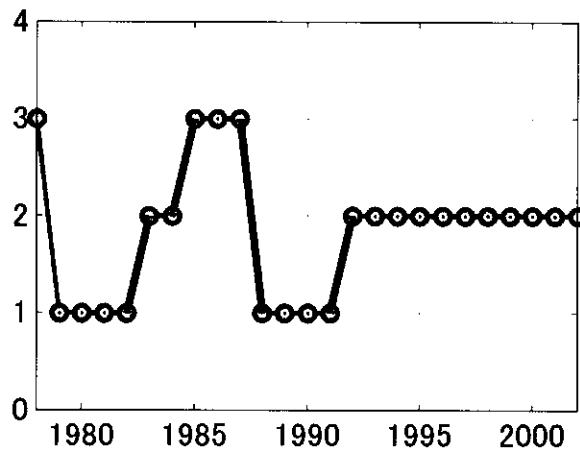
図 2-2 個人チェックリスト (改訂版)

2. 2. 変化プロセスの特定

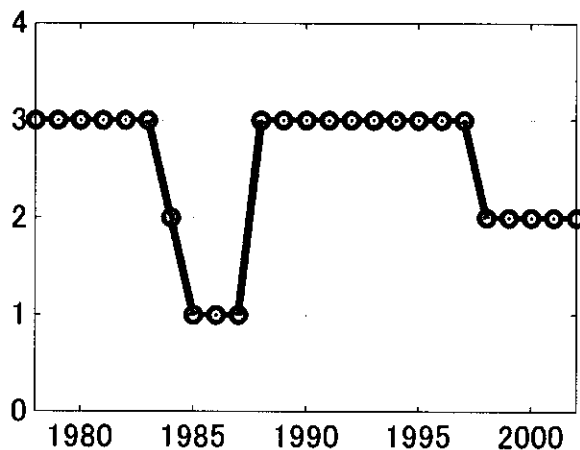
2.2.1. 特定基準

縦断的分析の対象者は5年以上入所期間をもつ者とした。そして、2年間以上同一のレベルを示し、ある時期に1レベル以上変化し、その状態が2年間以上継続している場合、<改善>あるいは<退行>とする。それ以外は<不変>として扱う。

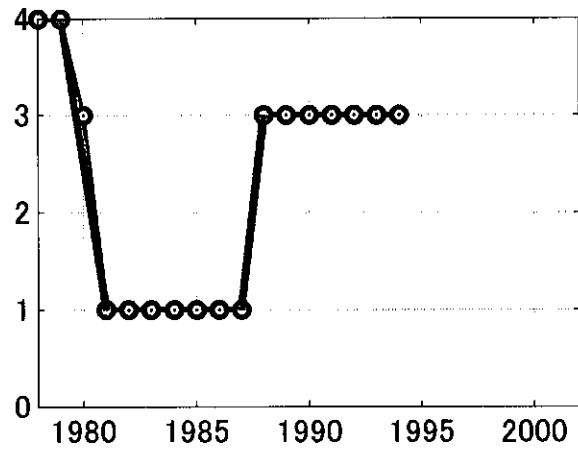
例1：個人内で変化が複数回発生している場合はすべてを集計する（図では4回）。（*：チェックリストに記載されているレベル，○：修正後のレベル，—（線）：「変化あり」と検出した箇所）



例2：連続した変化は1回の変化とする。最初の変化は2レベル変化したことになる。



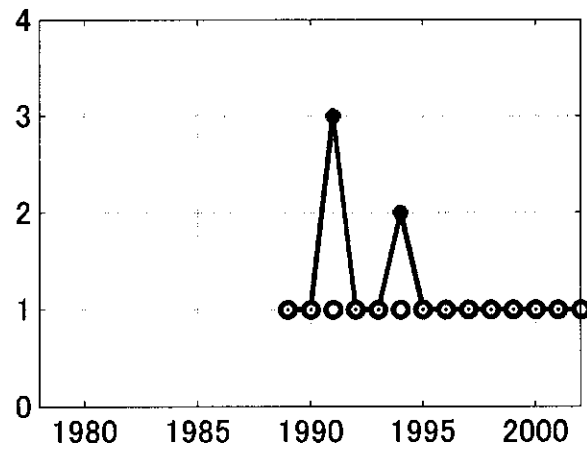
例3：連続した変化は1回の変化とする。最初の変化は3レベル変化したことになる。



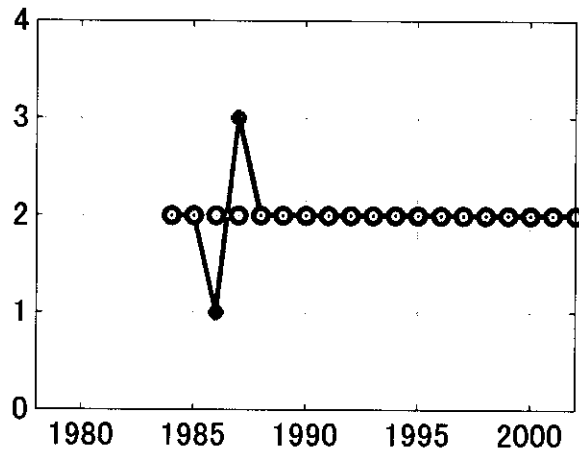
2.2.2 変化プロセスの修正

以下のデータは「変化なし」とみなす。

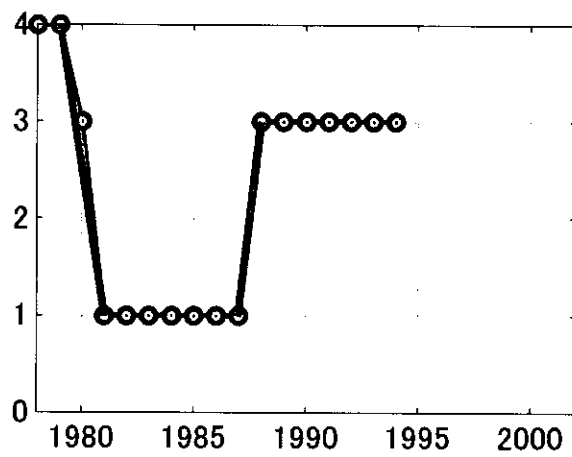
例1：1年度のみ変化した場合



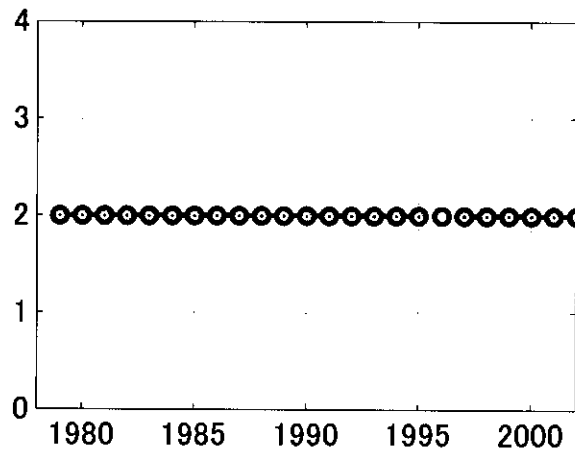
例2：1年度ごとに改善と退行を示したケース



例3：2レベル以上の退行した後に改善したケース



例4：1年度のみ欠損があり、レベルが維持しているケース。図では1996年度のデータが挿入されている。



2. 3. データ分析・処理

2.3.1. 一次分析（全体像）

各チェック項目について<改善（↑）>，<不変（－）>，<退行（↓）>の数を求める。結果の presentation は以下のような表形式で示す。個人内で複数回の変化がある場合は，その都度変化を特定する。従って，表内に示される<改善（↑）>，<退行（↓）>の数値は各変化状態の回数であり，<不変（－）>の数値は人数を表す。

| | | 変化後 | | | | |
|-----|---|-----|---|---|---|---|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 変化前 | 1 | － | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ |
| | 2 | ↓ | － | ↑ | ↑ | ↑ |
| | 3 | ↓ | ↓ | － | ↑ | ↑ |
| | 4 | ↓ | ↓ | ↓ | － | ↑ |
| | 5 | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | － |

(改善：↑，不変：－，退行：↓)

2.3.2. 関連分析

各チェック項目の<改善>，<退行>の2群について，変化が発生した時点（移行時）で，関連が想定される要因との相関ないし対比を分析する。関連要因としては，以下の要因を順次対象とする。なお，3章以降に分析結果をグラフおよび表によって示すが，その解釈は各チェック項目を専門とする研究者が担当し，関連が高いと考えた要因を中心に述べられている。

- a) 性別
- b) 年齢
- c) 入所期間（変化が発生するまでの期間）
- d) 大島の分類
- e) 身長
- f) 体重
- g) 主要病因（図 2-3）

主要病因分類表

| 時期 | 原因 | 障害内容 | 番号 |
|-------------|--------------|--------------------------------|-----|
| 出生前の原因 | 感染・中毒 B | 先天性風疹 | 111 |
| | | 先天性梅毒 | 112 |
| | | 先天性トキソプラズマ症 | 113 |
| | | その他の感染・中毒 | 114 |
| | 代謝障害 | 糖質代謝障害 A | 121 |
| | | アミノ酸代謝障害 A | 122 |
| | | 脂質代謝障害 C | 123 |
| | | プリン代謝障害 A | 124 |
| | | その他の代謝障害 A | 125 |
| | 母体の疾患 A | 妊娠中毒症 | 131 |
| | | その他の母体の疾患によるもの | 132 |
| | 不明の出生前の要因 | 原発性小頭症又は狭頭症 A | 141 |
| | | 水頭症 A | 142 |
| | | 神経皮膚症候群 A | 143 |
| | | 変性疾患 C | 144 |
| | 染色体異常 A | ダウン症候群 | 151 |
| | | その他の染色体異常 | 152 |
| | 特殊型その他 A | | 161 |
| | | | 162 |
| | | | 163 |
| | | 164 | |
| | | 165 | |
| その他不明のもの | | 166 | |
| 出生時・新生児期の原因 | 分娩異常 A | 機械的損傷による脳障害 | 211 |
| | | 低酸素症又は仮死 | 212 |
| | | その他の分娩異常によるもの | 213 |
| | 新生児期の異常 A | 低出生体重児(AFD又はLFD) | 221 |
| | | 低出生体重児(SFD) | 222 |
| | | 高ビリルビン血症 | 223 |
| | | 感染症に起因する脳損傷 | 224 |
| | | 新生児痙攣 | 225 |
| | | その他の新生児期の異常 | 226 |
| | その他 A | 血管障害(頭蓋内出血を含む、しかし、211によるものは除く) | 231 |
| | | | 232 |
| | | | 233 |
| | | | 234 |
| | | | 235 |
| | | その他不明のもの | 236 |

図2-3 (A) 主要病因分類表：A, B, Cを用いて大分類とする。(次頁へ続く)

A群：個体特性によるもので、発達が期待される(CPや遺伝性疾患など)

B群：出生前後の要因による破壊的病変(経過は停滞すると予想)

C群：進行性疾患に因るもの(経過は悪化と予想)

| 時 期 | 原 因 | 障 害 内 容 | 番 号 |
|----------------|----------------|---------------|-------|
| 周生期以後 の 原 因 | 外 因 性 障 害 B | 髄膜炎・脳炎 | 3 1 1 |
| | | 脳外傷 | 3 1 2 |
| | | 中毒性脳症 | 3 1 3 |
| | | 予防接種による脳炎・脳症 | 3 1 4 |
| | | その他の外因によるもの | 3 1 5 |
| | 症 候 性 障 害 | 血管障害 B | 3 2 1 |
| | | てんかん A | 3 2 2 |
| | | 頭蓋内腫瘍 B | 3 2 3 |
| | | 脳症 B | 3 2 4 |
| | | 精神障害による発達遅滞 A | 3 2 5 |
| | | その他の症候性障害 A | 3 2 6 |
| | そ の 他 | 環境因子による発達遅滞 A | 3 3 1 |
| | | | 3 3 2 |
| | | | 3 3 3 |
| | | | 3 3 4 |
| | | | 3 3 5 |
| | | その他不明のもの C | 3 3 6 |
| | 不 明 | | |

(注) 本分類表は、実態調査用紙(4)主要病因分類調査表と同じもので、番号をアラビア数字に直したものです。

図2-3 (B) 主要病因分類表 (A, B, Cを用いて大分類とする)

A群：個体特性によるもので、発達が期待される (CPや遺伝性疾患など)

B群：出生前後の要因による破壊的病変 (経過は停滞すると予想)

C群：進行性疾患に因るもの (経過は悪化と予想)

3. 運動機能

3. 1. 姿勢

◆旧版

| | |
|---|-------------------------|
| 1 | どんな姿勢でも首の坐りなし |
| 2 | ねたきりであるが腹臥位で頭を上げる |
| 3 | ねたきりであるが背臥位で（牽引反応）頭を上げる |
| 4 | よりかかっているの坐位可能 |
| 5 | よりかかりなしでの坐位可能 |
| 6 | 四つ這い |
| 7 | 膝立ち |
| 8 | つかまり立ち |
| 9 | 一人立ち |

◆改訂版

| | |
|---|----------------------|
| 1 | 寝たきりで、どんな姿勢でも首のすわりなし |
| 2 | 寝たきりであるが腹臥位で頭を上げる |
| 3 | 寝たきりであるが背臥位で頭を上げる |
| 4 | よりかかっているの座位 |
| 5 | よりかかりなしでの座位 |
| 6 | 膝立ち |
| 7 | つかまり立ち |
| 8 | ひとり立ち |

■ 旧版・改訂版を統合 ■

| | 旧版 | 改訂版 |
|----------|------------|---------|
| A. 原始反射期 | 1 | 1 |
| B. 立ち直り期 | 2, 3 | 2, 3 |
| C. 平衡期 | 4, 5 | 4, 5 |
| D. 協調運動期 | 6, 7, 8, 9 | 6, 7, 8 |

<図 3-1 (A)～(H)>

全体： 対象症例数 9308 名の中で不変群 6016 名を除いた、3292 名 (35.4%) に変化がみられた。改善は 2125 回、退行は 3125 回発生し、改善は退行に比べて少なかった（改善/退行：-32.0%）。また、改善と退行の和（5250 回）を変化を起こした症例数で除すると、変化が平均で 1.59 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は、A 群→B 群（597 回、改善回数の 28.1%）、B 群→